

Nagai Kafû : *La Sumida*  
traduit du japonais  
par Pierre Faure

金 沢 公 子

このほど永井荷風の『すみだ川』が、ユネスコの『東洋認識叢書』に入った。これは、東洋各国の代表的文学作品をフランス語に訳したもので、バリのガリマール書店から出版されている叢書である。そして日本からはすでに、『枕草子』、『世阿弥能秘伝書』、『好色五人女』、『雨月物語』、あるいは漱石の『心』、芥川の『羅生門ほか諸短篇』といった古今の作品が選ばれている。勿論私がここで書評の対象にとりあげる作品は、67年の昔、世に出た荷風の『すみだ川』ではなく、ピエール・フォール訳 *La Sumida* の方である。

当然のことながら、この訳書を前にしてまず私の気になったことは、日本文化個有の表現がどのように訳され、日本文学特有の情緒がどの程度伝えられているか、ということであった。この作品は、江戸伝来の美を宿す東京が急速に破壊されて行くのを目のあたりにした荷風が、「いにしへの名所を弔う最後の声」(『第五版すみだ川之序』)として書いたものである。従ってこれは、単に或る時、或る場所で起った人類普遍の初恋物語ではない。明治三十五・六年頃の夏からはじまるちょうど一年間、東京も隅田川を中にした浅草と向島の界限に限られ、主人公長吉の母は常盤津の師匠、伯父は俳諧師という、「正に消え失せんとする遠い過去の人物」(同

上)でなければならない。このような登場人物を中心として山のように盛り込まれた舞台装置(ほんの一例をあげよう。「六分心のランプ」,「丸髷の女房姿」,「金瓶大黒の華魁」,「初午の太鼓」…)を、訳者はどのように処理しているだろうか。このような好奇心を抱いて *La Sumida* を読んだが、こういった作品の場合にありがちな翻訳不可能論は、いさゝか私の頭に浮んでこなかった。それどころか、すぐれた外国の日本文学研究家、例えばドナルド・キーン氏の手にかかると、われわれ日本人が知りつくしていると思込んでいる自国の作品に思いがけない視点からの光があてられて、深い驚きと喜びを見出すことがよくあるように *La Sumida* にも感心させられることが多かった。

『すみだ川』の外国語訳としては、1965年に出されたサイデンステッカー氏の英訳がある。私はこれと対照しながら仏訳の方を読んてみたが、その結果、翻訳者としてのフォール氏がサイデンステッカー氏とは全く異なる独自の姿勢を持っていることに気がついた。その姿勢の原則は、よほどのことがない限り、訳文中に説明を加味した訳語を用いない、原文にあることだけを非常に忠実に訳す、ということである。そのため、日本個有の文物は例えば kimono, geisha は勿論のこと、下駄とか床の間に至るまで geta (英訳では sandals), tokonoma (英訳 alcove) となっていて、それらすべてに脚注がついている。この脚注が驚くほど行きとどいたもので、日本人として先刻承知の言葉の説明に時にはふき出したり、日本人でも知らなかった事柄を教えられて敬服したり、私はこの注を読むだけでも、ずい分楽しい思いをしたものである。例えば「煎餅屋」という語一つにしても、英訳では単に <the pastry shop> (p. 186) となっていて、パンやケーキでも売っているような感じを与えるが、仏訳の <le marchand de

senber>(p. 43) の注には、噛めばカリカリと音のする小さなビスケットのようなものだが、米の粉でできていて醤油の味つけがしてある、と詳細を極めている。また例えば、小梅に住む蘿月が川向うの今戸の妹を訪ねるため三囲稲荷の横手の小径を行くところで、「新しい貸長屋がまだ空家のままに立並んだ処もある」という原文は、〈…s'élèvent des enfilades de *nagaya* à louer encore inhabités〉(p. 33) となっている。そして *nagaya* の注には、安い家賃、二軒つづき、共同井戸などのほかに、これが江戸時代の庶民生活に大きな意義を持っていたことや、今日では落語家に咄の種を提供していることまで書いてある。また、学校をさぼって芝居見物をしている長吉が宮戸座の立見席で出会う小学時代の友人吉さんの服装に関して、「それが絹のハンケチを首に巻いて二重廻しの下から大島紬の羽織を見せ…」と原文にあるところは、〈Et c'était lui qui enroulait autour de son cou un foulard de soie, qui laissait voir sous son macfarlane un court *haori* en pongé d'Oshima…〉(p. 88) となっていて、注に、大島紬は非常に高価で美しい織物だがやや普段着っぽいおしゃれであり、インパネス (macfarlane) の方は明治五年頃日本に入ってきて三十年代に流行したもので、吉さんのこのおめかしはまだ新米という感じが出ているのである、と説明されている。あるいはまた「ホーカイ節」の注を読めば、これが主人公長吉の耳にする明治三十五年頃には、一時の隆盛もすぎずすでに流行おくれの俗謡だということがわかり、フランスの読者にも、初秋の夕暮、もの淋しい橋の上でなかなか来ない恋人を待ちわびる長吉の心の中がいっそうよく理解できるようになっている。このようにフォール氏の注は、単に原文枠内の字義にとどまらず、しばしば立派な日本文化論にもなっているといえる。

次に英訳にくらべたフォール訳の特色は、原文中に出てくる韻文 (常盤津、清元など) が、フランス語でもシラブルの数をきちんと揃えた定型詩になっているということである。(英語はすべて散文訳)。中でも第六章は宮戸座の芝居見物で、黙阿弥の浄瑠璃の語りが自在に折り込まれていて、おそらく訳者泣かせの箇所ではなかったかと思われるが、訳者の腕前はお見事である。遊女十六夜の台詞をみてみよう。

——落ちて行衛も白魚の、船のかかりに網よりも、人目いとうて後先に…

Egarée, désespérée,

Tremblant, blanc salanx,(イタリック体は筆者)

D'accrocher quelque regard,

Plus que le poisson

Nc craint le filet des barques

Eclairées de torches… (p. 82)

日本語の方が七・五調になっていれば、フランス語も各行のシラブルが七音五音の交互になっている。また白魚の注には「行方も (知らぬ) 白魚の」という掛詞のあることが説明されているが、仏訳第二行目の中に含まれる三つの「ラン」という音は、その掛詞の音調を移し得ているようにも思われる。この厳密さは私に、『珊瑚集』よりはむしろ『海潮音』の方を連想させる。上田敏のあの学匠的訳しぶりを。

一方訳者は、フランスの読者の理解を助けるため、小説の舞台となっている界限の、明治と江戸期の二枚の地図、および三枚の名所絵地図を掲載し、原作に出てくる個有名詞をローマ字で書き込んでいる。私は今回改めてこれらの名所絵地図を眺めながら『日和下駄』と『すみだ川』を読みかえし、荷風の足どりを辿り、蘿月や長吉の跡をつけてみて、これまで自分がこの小説に抱いていたイメー

ジが実にあやふやなものであったことに気づかされた。

なお訳文としてのフランス語の評価はフランス人にまかせるとして、私には少々直訳にすぎると思われる箇所がいくつかあった。そしてそれは時に誤訳に通ずることもある。例えば蘿月が「行水をつかった後其のまま**真裸**体(傍線筆者)で晩酌を傾け…」という傍線の部分は、文字通り〈encore complètement nu〉(p. 32)となっている。しかしこれではいかにも野蠻である。英訳の〈still half naked〉(p. 181)のように何か一枚ぐらい下着をきせてほしい。だがこういう注文を出した箇所は稀であった。

*La Sumida* には、この小説および『第五版之序』(大正2年)、『つくりばなし』(大正6年)の翻訳の他に、さらに訳者自身の作品解説が載っている。この「すみだ川論」は、今後荷風を論ずる者が参考にしなくてはならないような新しい論点をいくつか持っていて、立派な論文である。『すみだ川』が春水、一葉、柳浪から受けた影響はこれまでにしばしば論じられてきた。またこれが、パレスやロダンバックの郷土文学と関係のあることも、荷風自身あちこちで証言している。しかし、これが俳諧と江戸名所めぐりの浮世絵の世界のロマン化であると実証したものが、以前にあっただろうか。フォール氏は、戯画化された滑稽な人物描写には北斎の漫画を、江戸時代の面影を残している自然の描写には広重の浮世絵を、明治期の東京の描写には清親の版画を重ね合わせて、これらの絵と小説とが全く同じ世界を表現していることを指摘している。そういわれて私は手許にあった広重の『名所江戸百景』を眺めてみたが、例えば「柳しま」と題する浮世絵には、『すみだ川』第九章に描かれている赤い塀の妙見寺や、洗いざらした板塀の料理屋橋本が、すでにそっくりそのまま映像化されていることがわかった。

これと同じことは、訳者が本書に掲載している二枚の清親の版画「今戸の夏の月」と「月夜の今戸橋の茶屋」についてもいえる。このほかにも本論文中には、長吉お糸の恋と、劇中劇十六夜清心の恋の二重構造の分析や、蘿月宗匠の女房お滝の人物分析に、非常に感心させられたが、詳しくのべるには紙数が尽きてしまった。最後に一つ、フォール氏は「日本の批評家はこぞって、荷風がヨーロッパの郷土文学といわれるものから影響を受けたといい、荷風自身もわざわざレニエの作品に言及している…」(p. 121)と述べているが、私の考えでは、荷風のいうレニエの *Les vacances d'un jeune homme sage* は郷土文学という点ではなくて、長吉、お豊、蘿月夫妻、吉さんなどの人物創造に関わる面で、荷風に影響を与えているように思われる。

Nagai Kafû: *La Sumida*, traduit par  
Pierre Faure, Gallimard, 1975.  
cf. Edward Seidensticker: *Kafû the Scribbler*, Stanford University Press,  
1965.

J. D. O'Connor and G. F. Arnold :

*Intonation of Colloquial English*, 2nd ed.

松 坂 ヒ ロ シ

英語のかぶせ音素は、英語の諸相のうち、体系化が比較的困難なもののひとつであろう。まして、英語を外国語として教える場合にかぶせ音素をいかに扱うべきかという問題は、正確さを求める言語記述上の考慮と、煩雑さ